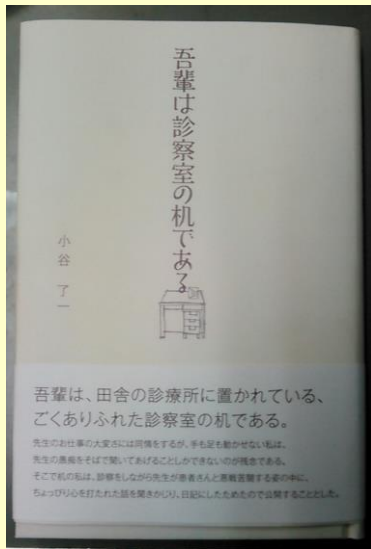
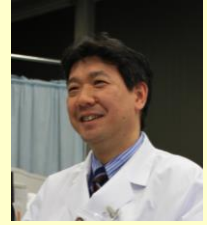


# 頑張れ小谷先生!!

## (ある診療所の机の告白)

総合内科医 川村 誠



主人公は身の丈 70cm、横幅 140cm、奥行き 70cm の診療所の机である。そこで働いている医師の名は小谷了一先生。クリニック土佐久礼の先生である。このたび「我輩は診察室の机である」を上梓された先生である。とにかく人の世は住みにくい時代にあって、長年高知の医療を支えていらっしゃる先生である。まだ高知市の小谷放射線科内科で、主に仕事をなさっている時から（現在は小谷敬太先生が主に診療をされています）岡村病院とは病診連携を取らせていただいています。

内容は 15 年にわたって診療された経験からのエピソード紹介の形をとっています。「老いたチンピラ」から始まり最後の「ありがとう」という副題とともに小谷了一ワールドが広がります。医療の話ですが、あくまで先生と患者との話であり、専門的になっていないのでご安心ください。個人的には先生が「年をとったせいかもしれないが子どもを診れば今からの先の日本のことを頼みたくなり、老人を診ればできるだけ元気に、一緒に楽しい老後を過ごそうと仲間意識が芽生えるのである」とあとがきで言われていることが印象的でした。自分ではまだまだこういう境地には達するのが難しいと今更反省仕切りでした。

先生は以前にも「もういいかい」「もういいよ」、「一枚の絵葉書」なども出版されています。多彩な才能、感性をお持ちの先生は写真にも造詣深く、以前はよく高知県医師会報の表紙での作品を拝見させていただきました。診療所ではなかなか正確な診断が難しいような状況もよくあります。小谷先生はその観察力の鋭さもあって早めに患者さんをご紹介いただき、その後の診療がスムーズに行えることがよくあります。病院の医師の立場からすると頼りになる上級医がいるような感じです。

このように書くとなかなか重厚感があって近寄りがたいイメージが出来るかと思えます。しかし実際お会いしてみると実に親しみやすく、それこそ診療室の机の高さよりさらに低い位置から穏やかにお話しされます。決して医者という立場から上から目線では診療しません。この点については我が身を振り返ってみると、いつも反省の必要性を感じてしまいます。

小谷先生 74 歳まだまだ現役診療で私たち世代をリードしていただく必要性を感じています。以上今回はどうしても今まで以上に小谷先生のふところの深さを感じたので熱く語ってみました。「我輩は診察室の机である」(高知新聞総合印刷) いかがでしょう。